

ヨーロッパにおける日本音楽の受容

——尺八の受容史ならびに2014年プラハ尺八フェスティバルの事例報告——

齋藤 完・リンデル グンナル*

Reception of Japanese Music in Europe

—History of the Shakuhachi in Europe and Report of 2014 Prague Shakuhachi Festival—

SAITO Mitsuru, LINDER Gunnar*

(Received September 26, 2014)

1. はじめに

本稿は海外における日本音楽の受容に関する一側面を、ヨーロッパにおける尺八の受容を例にして論じるものである。リンデルがその受容史を概観し、齋藤が最新の事例として2014年8月に開催されたプラハ尺八フェスティバルを報告する。

2. ヨーロッパにおける尺八の受容史

1970年代、アメリカに比べて若干遅く、尺八は欧州でも徐々に知られるようになってきた。欧州でもっとも早く師範・竹号を得たのはスイス人のアンドレアス普友グッツヴィラー(Andreas Fuyū Gutzwiller)であろう。グッツヴィラーは1970年、当時アメリカのコネチカット州ウェズリアン大学に客員教授として招聘されていた五世荒木古童にまず師事した。その後、荒木古童に続いて同大学に客員教授として招聘された川瀬勘輔(現三世順輔)にも手ほどきをうけ、その翌年には川瀬順輔に弟子入りしている。その後彼は1976年にヨーロッパ初の師範となる。

グッツヴィラーは1974年にウェズリアン大学で博士号を取得した。博士論文のタイトルは、「尺八——その歴史、練習、指南の要素」で、おそらく最初の尺八に関連する博士論文と思われる。グッツヴィラーの論文を含む、英語で書かれた尺八関連の博士論文には次のようなものがある。

【表1：英文による尺八関連の博士論文一覧】

名前	題名	大学名	年代
Gutzwiller, Andreas	<i>Shakuhachi: Aspects of History, Practice and Teaching</i>	Wesleyan University	1974
Takahashi Tone	<i>Tozan-ryū: an innovation of the shakuhachi tradition from Fuke-shūto secularism</i>	Florida State University	1990
Lee, Riley Kelly	<i>Yearning for the Bell: A Study of Transmission in the Shakuhachi Honkyoku Tradition</i>	University of Sydney	1993

*ストックホルム大学

Franklin, James Ashley	<i>Between Worlds</i>	University of Sydney	1997
Day, Kiku	<i>Remembrance of Things Past: Creating a Repertoire for the Archaic Jinashi Shakuhachi</i>	University of London	2010
Linder, Gunnar Jinmei	<i>Deconstructing Tradition in Japanese Music: A Study of Shakuhachi, Historical Authenticity and Transmission of Tradition</i>	Stockholm University	2012

アカデミックな側面では、欧州はアメリカやオーストラリアと並んでいることが分かる。上記の他に、デンマークのトルステン・オラフソン (Torsten Olafsson) も、17世紀に書かれた虚無僧らの一つの重要な文献である『街道本則』についての修士論文を1987年にコペンハーゲン大学に提出した。欧州における1970年代から現在までの研究では、主に日本の古い音楽文化に焦点が当てられる傾向があったと言えよう。そこにおける関心は大きく二つあるように思われる。一つは、形の上では臨済宗に属していた虚無僧らの在り方など歴史的な背景への関心、そしてもう一つは、そこから産まれた音楽文化である尺八古典本曲に、現存しているヨーロッパ音楽文化とは違った要素が含まれていることを見いだす、音楽的な関心である。

尺八の演奏を学んでいる人々にも二つのタイプが見られる。まず一方には、禅的な思想に惹かれて尺八を習おうと思う人々がいる。たとえば、オラフソンは明暗尺八を学び、ドイツのティロ・ブルダシュ (Thilo Burdach) は1986年より西村虚空に師事した。また同じくドイツ人のディートマルー風ヘリガー (Dietmar Ippū Herriger) は1988年より福岡の臨済宗の寺で江戸時代には虚無僧寺と知られている一朝軒で、そこに伝承されている尺八本曲を習った。オラフソンと同じデンマーク人である菊・デイ (Kiku Day) も80年代より地無し尺八を奥田敦也に師事するなど、要は、尺八本曲のみに興味をもって習う人々がいるということである。ヨーロッパでは、尺八本曲だけの演奏会や尺八本曲をテーマとするワークショップなどが開催されることはしばしばある。

他方、禅的あるいは内面的な要素にとどまらず、尺八を音楽的にとらえようとする傾向もある。たとえば菊・デイ一人だけを例として取り上げてみても、彼女は新しい音楽コラボレーションを試みたり、武満徹の作品を演奏したりするなどしており、こういった事例は他にも数々見られる。またハリポッターの映画には、イギリスのクライブ・ベル (Clive Bell) という音楽家の尺八が流れている。

1990年代より、欧州の各地において、小規模の尺八ワークショップおよび一対一の教授が行われてきた。その中で、上述したグッツヴィラーはもっとも多く師範を生み出した。その他、例えばパリ在住のダニエル・リーフェルマン (Daniel Lifermann) も90年代から現在まで定期的にワークショップなどを開催し、現在は主に福田輝久を招いて講習会を行なっている。2000年代の前半より横山勝也に師事した、ドイツ在住のオーストラリア人であるジム・フランクリン (Jim Franklin, 1996年竹心会師範)、フランスのヴェロニク・ピロン (Veronique Piron, 2002年竹心会師範)、スペイン在住のアルゼンチン人であるホラチオ・クルティ (Horacio Curti, 2004年竹心会師範) も活動を広げ、いわゆる国際研修館 (竹心会) 伝承の道曲 (本曲) を教える。この三人は皆、音楽家であり、他の楽器も奏で、また他の楽器とのコラボレーションおよび作曲も音楽活動の中に取り入れている。

尺八が持つ音楽文化に特に興味をもっている人が多いことを上述した。欧州では、いわゆる明暗尺八古典本曲 (音楽としてというよりも瞑想を目的として奏でる)、琴古流古典本曲、海

童道祖から伝承された国際研修館（竹心会）の道曲など、洋楽と異なる音楽的な要素が含まれるものにまずは興味をひかれる傾向がある。しかし、新都山流フランス支部の狩谷箏山（そうざん）に師事する人もかなりいる。その中では、ラグロ水山（Jean-François Suizan Lagrost）が特に活動をしている。

琴古流は、瞑想的な明暗流や一朝軒伝承の本曲などと、洋楽的な要素の多く取り入れられている都山流の中間にあるとも言える。琴古流においても、特に竹友社（川瀬順輔）と竹盟社（山口五郎）の芸風による演奏や指導は欧州各地で盛んに行われている。竹友社を代表するスイスのグッツヴィラーをはじめ、また竹盟社を代表するイギリスのマイケル蒼盟コクソール（Michael Sōmei Coxall）とスウェーデンのリンデル儘盟（筆者）もそれぞれに活動している。竹友社のスイス支部や竹盟社欧州支部は、本曲以外に地歌箏曲の合奏にも力を入れている。琴古流において重要な役割を果たしている地歌箏曲は、本曲よりも理解されるのが難しいように思われる。日本の遊郭にまつわる古い情緒を含んだ日本語の歌詞を理解すること、またその歌詞には掛詞なども多用されているので、翻訳しても文化的な背景がなかなか伝わらない。音楽としての良さを演奏でアピールするのもより難しいだろう。とはいえ、最近、地歌箏曲を習いたいという人が増えつつある。

2000年代半ばごろまでは、各地において小規模の催し物があつたものの、交流は盛んではなかった。尺八愛好家間の交流を図るため、2006年にヨーロッパ尺八協会（ESS=European Shakuhachi Society）がNPOとして成立した。同協会は、上述したジム・フランクリン、菊・デイ、マイケル蒼盟コクソールの三人を中心として設立され、筆者（リンデル）は顧問として協力した。設立の目的は、多くの流派や流儀のそれぞれの可能性を探究し、またそれらの異なる点を称賛することができる環境を提供することである。

ESSは2006年以降、世界規模のワールド尺八フェスティバルが開催される年以外には毎年、サマースクールを企画している。これまで、ロンドン（2006年、2011年）、フランスのアルザス地方（2007年）、オランダのライデン（2009年）、プラハ（2010年）、バルセロナ（2013年）、南ドイツ（2014年）で開催されてきた。来年はパリで開催される予定である。ESSの目的に基づき、サマースクールでは多様性を重視する。従って、なるべく多くの流派・流儀を含むこと、また、中心になる流派を年毎に替えることが望ましいという方針をもって運営されている。たとえば、今年のサマースクールでは竹心会（KSK）を中心に行われたが、来年は都山流を中心として行われる。つまり、ESSは、尺八愛好家間の意見交換、コミュニケーションを重視したいという狙いから生まれたものである。ESSの会員数は、71人である（2014年9月現在）。今まで最多会員数は95人であった（2012/13年度）。ESSのサマースクールに参加人数はおおよそ50-70人である。

ESSが成立したのと同じ2006年から、プラハでも独自の尺八フェスティバルが毎年開催されている。2010年のESSサマースクールはプラハのフェスティバルと提携し、プラハで行われた。また、2016年には、プラハの企画側とESSが共同企画するWorld Shakuhachi Festival 2016を実施する予定である。2014年のフェスティバルの様子についてはこの記事の後半で詳しく述べられている。一言添えるなら、プラハのフェスティバルは、尺八本曲、箏・三味線との合奏、またその他の楽器との合奏（現代音楽）の三本の足が支えており、また音楽学のコンファレンスも同時に開催されている。実践と学問の両者を取り入れた催しである。

総括

欧州における尺八の普及は、1970年代から尺八を習い始めた数少ない奏者の活動によって始まり、1990年代までは、ローカルな活動にのみ留まっていた。それが、1980年代から尺八を習い始め、特に2000年代の前半から活動をし始めた奏者の活動によって、より広く受容されるようになった。またプラハ尺八フェスティバルやヨーロッパ尺八協会のサマースクールの開催によって、愛好家間の交流が深まるにつれ、尺八音楽がより幅広く知られるようになりつつある。そこでは、流派を問わない交流があり、また互いに習い合うという姿がみられる。もともとは都山流の人が竹心会の本曲を習い、竹心会本曲（道曲）を中心に習っている人が琴古流の地歌箏曲合奏を習うというような、日本での尺八の学習とは異なる形がそこにはある。そのような学習の結果として、それぞれのスタイルの良さを理解し、その上で自分自身の目指したいスタイルもまた見えてくるというケースが出てくる可能性もある。尺八音楽は、多様に受容されつつあると思う。ヨーロッパだからこそ、尺八を（楽器とその音楽）多様に受容できる、といえるかもしれない。

3. プラハ尺八フェスティバル

プラハ尺八フェスティバル（以下、尺八祭）は、2006年の第一回目以降、毎年開催されている。2003年に尺八イベントがあるが、これは本尺八祭とは別であるとのことだ。

尺八祭は主にワークショップ、コンサート、講演からなり、参加者のほとんどはワークショップで研鑽を積むことを目的としている。参加者はチェコ人というよりも、ヨーロッパ各地に在住する尺八愛好家を中心に、毎年平均して30人ぐらいが集う。講師陣はヨーロッパで活動する尺八家に加えて、その年のテーマに合わせて日本からも演奏家を招待している。また2013年からは尺八とは接点のほとんどないであろうと考えられる音楽のワークショップも取り入れている（13年にテルミン、14年にスロバキアの伝統楽器フヤラ）。

現地での調査に基づき、以下に2014年の概要を示したい。

2014年の尺八祭は8月22日から26日の五日間にわたり開催された。場所はプラハ芸術アカデミー音楽部（略称HAMU）¹。尺八祭ではアカデミーのレッスン室、レクチャーホール、ギャラリー、中庭特設ステージが会場として使用された。

今年度の参加者は全部で31名である。出身国はアメリカ、イギリス、オランダ、スロバキア、チェコ、ドイツ、日本、フランス、ポーランド、レバノンとなっている（五十音順）。

講師陣は次の通り。アントニオ炎山オリアス Antonio Enzan Olías（スペイン）、ヴラティスラヴ・マトゥーセク Vlastislav Matoušek（チェコ）、クリストファー遙盟 Christopher Yohmei Blasdel（アメリカ）、ジム・フランクリン（ドイツ）、ラグロ水山（フランス）、ディートマルー風ヘッリガー（ドイツ）、藤原道山（日本）、リンデル儘盟（スウェーデン）²。日本人尺八演奏家は年によって招待される顔触れが異なる。2008年には琴古流の三橋貴風、2009年には古典本曲の善養寺恵介、2010年は都山流の山本真山と竹保流の志村禅保、2011年は竹保流の酒井松道、2012年には普化尺八の高橋龍童、2013年には三橋貴風となっており、2014

¹プラハの歴史観光地区に位置しており、建物の向かいには観光の目玉の一つに数えられる聖ニコラス教会がある。同会場になったのは2010年からで、それ以前は新市街のタウン・ホールなどを使用していた。

²クリストファー遙盟は日本在住。フランクリンの出身はオーストラリア、現在ドイツ在住。

年は都山流尺八の紹介がテーマとなっているために同流に属する藤原道山が招待されるに至った。

以下、尺八祭の様態を時系列に沿って報告したい。

22日（初日）。

18時から19時にかけて受講者たちによる参加登録がおこなわれ、初参加者に対しては会場案内もなされた。

20時から「境界線を越えて」と題されたオープニング・コンサートがアカデミー中庭の特設ステージで催された。まず奏されたのは尺八祭を主宰するヴラティスラヴ・マトゥーセク作曲の《Shika no Walk In》という曲である。古典本曲の《鹿の遠音》に基づいた2小節からなるフレーズが12パターンあり、そのパターンのいずれか一つが尺八祭の参加者（講師・受講生）全員に予め渡され、参加者はひたすら同じフレーズを吹き続けるという構成である。これに続いたのが、ジム・フランクリン作曲による《Songs from the Lake No. 6（‘Spiral Eddies’）》。尺八と電子音楽からなるこの作品はおそらく本コンサートの題名「境界線を越えて」に結びつくものと考えられる。



【図1：オープニングコンサート】

《Shika no Walk In》は参加者が客席から吹奏しながらステージに向かうというパフォーマンスを伴っていた。左は今尺八祭のゲスト・藤原道山。右は主宰の作曲家・ヴラティスラヴ・マトゥーセク。

23日（二日目）。

8時半にレクチャーホールにて口吹きが始められ、これが事実上の尺八祭の開幕となった。20分ほどの口吹きのあとで講師陣の紹介があり、その後に藤原道山による全体講習が9時半から始められた。身体の使い方や息の角度など、基本的なテクニックが伝えられ、参加者はメモをとったり、自ら吹いたりして講習を受けている。同時間帯にはスロバキアの楽器フヤラと箏の講習も別会場でおこなわれており、これらに参加する受講者は同室にはいない。



【図2：口吹き】

口吹きとは尺八の手穴を全部ふさいだ状態（＝音名「ロ」）の乙音（低音）をひたすら吹き続ける、いわばウォーミングアップである。

その後、自らのレベル・関心に合わせて、ワークショップ会場に分かれていく。レベルは初級から上級まで五段階に設定されていて、たとえば、初級＝尺八入門、初級中級＝《八千代獅子》、中級＝《朧月》、中級上級＝《万華鏡》、上級＝《産安》という具合である。一人の講師が異なる時間帯に異なる曲を教える場合もあり、たとえば藤原道山はいずれも中級上級者用として《木枯》《甲乙》《懐月調》を担当していた。

以下に示す表は二日目11時以降のワークショップのスケジュールである。尺八の場合には曲名、レベル（初級→B、初中級→BI、中級→I、中上級→IA、上級→A）、講師名（アントニオ炎山オリアス→AEO、ヴラティスラヴ・マトゥーセク→VM、クリストファー遙盟→CYB、ジム・フランクリン→JF、ラグロ水山→LS、ディートマー→風ヘッリガー→DIH、藤原道山→FD、リンデル儘盟→LJ）も記載している。なお、「八千」は《八千代獅子》、「霧海」は《霧海箏鈴慕》、「木枯」は《木枯》と《懐月調》の二曲、「園秋」は《園の秋》、「サイ」は《Silent/Liste.1》の略称。

【表2：23日ワークショップ】

	Lecture H	Room 1	Room2	Room3	Room4	Room5
1100-1230	フヤラ	絵夢 I/CYB	朧月 I/DIH	八千 BI/LJ	箏	壺越 A/LS
1330-1500	フヤラ	甲乙 IA/FD		産安 A/JF	箏	霧海 I/LJ
1500-1630	電子音楽	木枯 IA/FD	園秋 IA/LJ	サイ BI/LS	箏	入門 B/CYB

ワークショップは一人の講師に対して、複数の受講生がグループ・レッスンを受けるかたちで、とくに定員は決められていないようだ。日本に比べるとかなり「自由」な雰囲気、手本を示しているそばから吹き始めたり、説明の途中で質問を挟んだり、なかには足を組んだり（正座ではなく、受講生は椅子に座る、あるいは立ってレッスンを受けている）と、日本ではあまり見られない光景もあったが、熱心であることには疑いもない。

17時から18時はフヤラと尺八のコラボレーション公演。場所はギャラリーと呼ばれる100人ぐらゐを収容できる小ホールである（以下、すべてのコンサートはこのギャラリーで開催される）。ドゥシャン・ホリックのフヤラとアントニオ炎山オリアスの尺八による共演なのだが、オリアスはフヤラの演奏にも堪能で、フヤラの二重奏も披露された。

20時から「禅：有音と無音の狭間」と題された本曲コンサートがおこなわれた。演目は順にリンデル儘盟が琴古流の《秋田菅垣》、ジム・フランクリンが海童道の《息観》、ヴラティスラヴ・マトゥーセクが明暗流の《善哉》、ディートマル→風ヘッリガーが明暗流の《鳳鐸》、クリストファー遙盟が琴古流の《下がり葉の曲》、藤原道山が都山流の《懐月調》と、日本国内では実現が難しい組み合わせであった。

24日（三日目）。

三日目から最終日まで、基本的に「口吹き→ワークショップ→コンサート」という流れで尺八祭は展開していく。

三日目の尺八関連ワークショップは次の通り。「本手」は《本手調子》、「個別」は「個別指導」（30分×3回）、「モダ」は《Modus Variabills》、「万華」は《万華鏡》の略称。

【表3：24日ワークショップ】

	Lecture H	Room 1	Room2	Room3	Room4	Room5
0900-1030	電子音楽	フヤラ		壺越 A/LS	箏	
1030-1200	入門 B/CYB	木枯 IA/FD	本手 B/DIH	園秋 IA/LJ	サイ BI/LS	調べ B/JF
1330-1500	産安 A/JF	甲乙 IA/FD	個別 LS	霧海 I/LJ	箏	虚鈴 B/VM
1500-1630	フヤラ	絵夢 I/CYB	八千 BI/LJ	モダ BI/VM	万華 I/LS	朧月 I/DIH



【図3：ワークショップ】

ワークショップはプラハ芸術アカデミー音楽部のレッスン室でおこなわれた。二重ドアで防音されており、外部からの音は遮断されている。写真は23日におこなわれたリンデル儘盟による琴古流外曲の「八千代獅子」。

18時半から「山本邦山の遺産」と題する講演（斎藤担当）が予定されていたが、17時からのアミット・チャテルジー Amit Chatterjee のシタール公演が大幅に延び、実際の開始時間は19時10分となった。同公演は次に続く「山本邦山メモリアルコンサート」の基調をなすものであるが、大きな流れでは都山流の紹介という枠組みで設定されたものである。

20時15分からメモリアルコンサート。だが、開始時間が遅れることが予想されたために、急遽、藤原道山がプログラムにはなかった山本邦山作曲「竹の四季 夏」を奏することになった。20時30分からは予定どおりに、以下のプログラムでコンサートは進行した。ラグロ水山と菊地奈緒子による「壺越」、ラグロ水山とアントニオ炎山オリアスによる「対動」、藤原道山とアミット・チャテルジーのシタールによる即興コラボレーション、菊地奈緒子による「鳥のように」、藤原道山とクリストファー遙盟による「竹」、そして藤原道山とラグロ水山とアントニオ炎山オリアスと大迫晴山³による「陰陽句」。即興と菊地の演奏以外は山本邦山作品である⁴。

25日（四日目）。ワークショップは次のとおり。なお、「タレ」は「Talea tacts Est」の略称。

【表4：25日ワークショップ】

	Lecture H	Room 1	Room2	Room3	Room4	Room5
0900-1030	電子音楽	個別 LJ	フヤラ	壺越 A/LS	箏	モダ BI/VM
1030-1200	個別 CYB	木枯 IA/FD	園秋 IA/LJ	調べ B/JF	フヤラ	虚鈴 B/VM
1330-1500	産安 A/JF	甲乙 IA/FD	個別 LS	フヤラ	園秋 IA/LJ	朧月 I/DIH
1500-1630	万華 I/LS	絵夢 I/CYB	入門 B/CYB	タレ I/VM	本手 B/DIH	フヤラ

³プラハ在住の都山流奏者。

⁴本作は山本邦山作品ではなく、山本邦山の「盟友」とされる沢井忠夫の作品である。

17時からディートマル一風ヘッリガーによる明暗流尺八（一朝軒）の演奏が18時までおこなわれ、20時からは「現代音楽の夕べ——心の風景——」となった。20時からの次第は次の通り。ヴラティスラヴ・マトゥーセクほかによるマトゥーセク作曲《手拍子のリサイクル Clapping Music Recycled》、リンデル儘盟と菊地奈緒子と服部佐知子による《園の秋》⁵、ジム・フランクリンによるフランクリン作曲《リップルズ、ソングス・フロム・ザ・レーク第二番 Songs from the Lake No. 2 (‘Ripples,’ 2014 version)》、ラグロ水山とジム・フランクリンによるフランクリン作曲《サイレント・リッスン1 Silent/Liste.1》、藤原道山による山本邦山作曲《甲乙》、ジム・フランクリンとガドルー・ウェー弦楽四重奏団によるフランクリン作曲《ゼン ZeN》、クリストファー遙盟によるクリストファー遙盟作曲《踊る燃素 Dancing Phlogiston》、アントニオ炎山オリアスと菊地奈緒子による沢井忠夫作曲《風の歌》、藤原道山とクリストファー遙盟とラグロ水山とジム・フランクリンによるマトゥーセク作曲《四本の尺八のための「タレア・ラクタ」》。

26日（最終日）。ワークショップは次のとおりである。

【表5：26日ワークショップ】

	Lecture H	Room 1	Room2	Room3	Room4	Room5
900-1030	電子音楽	入門 AEO	フヤラ	万華 I/LS	箏	個別 FD
1030-1200	個別 JF	入門 AEO	壺越 A/LS	霧海 I/LJ	フヤラ	個別 FD
1300-1430	タレ I/VM	個別 LJ	産安 A/JF	フヤラ	箏	万華 I/LS
1430-1600	講演 LJ				箏	フヤラ

14時半からレクチャーホールではリンデル儘盟による講演「ポピュラリティに直面する尺八」が一時間にわたって催され、この問題を考えるにあたって必要な理論的な枠組みが提供された。途中から藤原道山による自作の解説（ポピュラリティとの具体的な接点）が加えられたうえで、15時半から同じ場所にて同一テーマでパネルディスカッションがおこなわれた。パネリストは先の二人に加えて、クリストファー遙盟とラグロ水山とジム・フランクリン。そして尺八祭ディレクターのマーレク・マトゥヴィヤが司会を務めた。最後に20時から受講生がワークショップの成果を披露するコンサートが開かれ、閉幕となった。



【図4：受講生による発表会】

古典本曲《虚鈴》を吹奏する受講生と尺八祭を主宰する作曲家・ヴラティスラヴ・マトゥーセク（右から三番目）。受講生は講習を受けた曲を数曲合奏で披露する。

⁵この曲はいわゆる地歌箏曲の「古典」であるが、微分音やテンポの揺れなど、現代音楽に通じる要素を有しているとの理由から本プログラムに編入された。

総括

二日目の本曲コンサートに象徴されるように、ヨーロッパにおける尺八は音楽面よりも、むしろ精神面に対する関心から普及している。全体的に古典本曲中心主義的な傾向があり、それはワークショップでの講習曲にも反映されている。そうしたなか、「山本邦山メモリアルコンサート」のように都山流の楽曲、しかも現代邦楽作品を中心としたプログラムがヨーロッパ人の演奏家を交えたうえで構成できたのはヨーロッパにおける尺八受容、ひいては日本音楽受容が新しい局面を迎えていることを示しているのかもしれない。

4. 今後の課題

今後は、本稿で明らかにした尺八の受容史ならびに事例を、海外（とくに欧米圏）における日本文化の紹介と受容の流れに位置づけ、その意義や意味を明らかにしたいと考えている。